

第5章 シャイネスの認知・感情・行動的側面を測定できる新しい尺度の開発

第1節 本章の問題とねらい

既に第2章第2項で述べたことを踏まえて、ここではシャイネスを以下のように理解する。社会不安との関係に関しては、シャイネスは社会不安の一種（下位概念）であるとする。社会不安とは、「現実の、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安」であり、その極端な場合が社会恐怖である（American Psychiatric Association, 1994; Leary, 1983a）。次に、随伴性という点に関しては、シャイネスはスピーチ不安などとは異なるものとする。すなわち、シャイネスとは、「継続的に自分と相手とのコミュニケーションをモニターしなければならず、相手の反応によって随時自分の反応も変化させていくことが求められる」という、随伴性の高い場面に生じるものである（随伴的な対人場面; Leary, 1983b）、とみなす。また、シャイネスの徴候は、認知（自分の行動、他者からの評価などに対する不合理な思考）、感情（情動的覚醒と身体・生理的徴候）、行動（社会的スキルの欠如、回避的行動など）の3つの側面に現れうる(e.g., Cheek & Melchior, 1990; van der Molen, 1990)、ととらえる。このように3つの側面をもつとされるシャイネスに対する適切な心理療法としてSITの技法を含むCBTがある。それは、CBTが、従来の行動療法を基盤として発展したもので、人間を認知・感情・行動の側面から包括的にとらえ、こうした側面に総合的にアプローチしようとするものだからである（根建・石川, 1990）。

SITのようなCBTの技法を用いてシャイネスの改善に取り組もうとするときには、行動論的アセスメントの理念にたえうる、科学的なアセスメントが不可欠である。最近の行動論的アセスメントの動向は、認知的な要素を取り入れてきており、人間を認知・感情・行動という側面から包括的にとらえるべきだという主張がなされている。ところで、特性シャイネスのアセスメント法のうちで、広く利用されている自己報告式の尺度の代表的なものを概観してみると、認知の側面も含めて測定できるものはまだ開発されていない。そこで研究1では、特性シャイネスの3つの側面全てについて測定できる項目を含む尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検討する。

第2節 新しい特性シャイネス尺度 (Waseda Shyness Scale: WSS) の作成と信頼性・妥当性の検討 (研究1)

調査 I

目的

調査 I の目的は、認知的側面も含めて、特性シャイネスを認知・感情・行動の側面から総合的に測定できる新しい尺度 (Waseda Shyness Scale) を作成することである。

1. 予備調査

目的

予備調査の目的は、特性シャイネスを測定しうる項目を用意し、項目分析をして弁別力の高い項目を抽出すること、及びそれをもとに本調査で用いる尺度を作成することである。

方法

項目の準備：

シャイネスに関する主要な文献、特性シャイネス尺度 (相川, 1991)、社会不安の尺度 (Fear of Negative Evaluation; 以下 FNE, Social Avoidance and Distress Scale の日本版; 以下 SADS; 石川・佐々木・福井, 1992, Personal Report of Communication Apprehension : McCrosky, 1970)、不合理な信念の尺度 (The Idea Inventory; Kassinove, Crisci, & Tiegerman, 1977; 日本版 Irrational Belief Test; 松村, 1991) などを参考にして、シャイネスに特徴的な項目を選び出した。集められた項目は、心理学系の助教授、助手、大学院生の3人の話し合いによって認知・感情・行動のカテゴリーに分類された。

項目を選定する際の選定基準は、以下の通りであった。認知の側面を測定する項目は、不合理な思考や認知の歪みに関するものに限定した。感情の側面を表す項目は、情動と身

体・生理的反応に関するものであった。行動の側面を表す項目は、回避行動という「行為」と、それよりも階層構造的（春木，1989）により低次元にある体動や動作といったノンバーバル行動、そして社会的スキルに関するものであった。以上のものをもとに質問紙の項目を作成した。項目は認知、感情、行動の各側面についてほぼ同じ数を含むようにし、逆転項目も交えながら80項目の質問紙を作成した。回答の方式は、各項目について、「ぴったり当てはまる：5」、「だいたい当てはまる：4」、「どちらともいえない：3」、「あまり当てはまらない：2」、「まったく当てはまらない：1」までの5段階のいずれかに○をつけさせるというものであった。

調査対象者：

関東圏のA大学の学部生。得られた回答のうち記入もれや記入ミスのあったものを除き、有効回答者合計152名（男性83名、平均年齢19.40歳、SD1.48；女性69名、平均年齢18.84歳、SD.80）のデータを分析対象とした。

調査時期：

1994年6月中旬に調査を行った。

手続き：

作成した質問紙を調査対象者に実施した。まず、大学の通常の授業内で質問紙を配布し、各自のペースで回答させ、回答し終わった者から提出させた。その後、回収した質問紙の回答について結果の項で示す分析を行った。

結果と考察

回答の点数化：

各項目の粗点を合計し（逆転項目は、点数を反転させて）、以下の分析に使用した。

分布図の視察：

項目ごとのヒストグラムを視察し、明らかに正規分布していない9項目を除外した。

項目分析：

G-P分析を用いて、総得点の上位、下位それぞれ25%に含まれる者の項目ごとの得点についてt検定を行った。その結果、有意な差がみられなかった4項目を除外した。最終的に67項目に絞りこみ、以下に述べる本調査のための質問紙を作成した。

2. 本調査

目 的

予備調査で作成された尺度について因子構造の検討及び項目分析を行うことによって、更に項目を選択し、最終的な尺度を作成することを目的とする。

方 法

調査対象者：

関東圏のA大学の学部生。得られた回答のうち記入もれや記入ミスのあったものを除き、有効回答者合計256名（男性104名、平均年齢20.39歳、SD1.19；女性152名、平均年齢20.16歳、SD1.18）のデータを分析対象とした。

調査時期：

1994年7月上旬に調査を行った。

手続き：

予備調査で作成された67項目の質問紙を実施した。実施の方法は予備調査と同じであるが、一部のクラスに対しては、授業の実施上の都合で、各自の自宅に持ち帰って回答したものを回収ボックスに提出させるという形をとった。その後、全ての回答をまとめ、結果の項で記す分析を行った。

結果と考察

(1) 回答の点数化

各項目の粗点を合計し（逆転項目は、点数を反転させて）、以下の分析に使用した。

(2) 因子分析と項目分析

因子分析①、因子分析②、項目分析、因子分析③の順で行った。

因子分析①：

主因子法・バリマックス回転を用いて、因子分析（因子の打切り基準は、固有値1.00以上）を行った。その結果、8因子が抽出された。寄与率は、第1因子は.58、第2因子.14、

第3因子 .08, 第4因子 .06, 第5因子 .05, 第6因子 .04, 第7因子 .03, 第8因子 .003であった。この際、因子負荷量 .40未滿のもの及び2重負荷(因子負荷量 .40を基準にして)のある項目を除外した。

因子分析②：

因子分析①の結果残った44項目について因子分析を行った(主因子法・バリマックス回転を用いて、因子の打ち切り基準は、固有値1.00以上)。その結果、5因子が抽出された。寄与率は、第1因子が .11, 第2因子 .11, 第3因子 .08, 第4因子 .07, 第5因子 .05であり、累積寄与率は、.41であった。次に、各因子で因子負荷量の高いものについて特徴を検討した結果、第1因子：行動的側面、第2因子：感情的側面、第3因子：感情的側面、第4因子：認知的側面、第5因子：認知的側面と、各側面に分かれたので、これを各因子の仮の名称とした。

項目分析：

因子分析②の結果、因子負荷量 .40未滿のもの及び2重負荷量(因子負荷量 .40を基準にして)のある項目を除外し、更に各因子の中で仮に命名した側面と異なるものを除外し(例えば、第2因子として命名された「感情的側面」の中に行動を表した項目があった場合、それを除外した)、34項目に絞った。残った項目それぞれについて、G-P分析を用いて、総得点の上位、下位25パーセントの者の得点に関して t 検定を行った結果、1項目だけ有意な差がみられなかったため、それを除外した。

因子分析③：

これまでの分析の結果残った項目の中で、各因子において因子負荷量の高いものから5項目ずつ採択した。最終的に25項目に絞ったものを因子分析した。Table 5-1にその因子構造、寄与率、累積寄与率を示す。逆転項目への回答については、素点を反転させるので、いずれの因子についても、因子得点が高いほどシャイネスが高いことを意味する。

因子1(行動的側面：消極性)においては、逆転項目が含まれる。この因子は、シャイネスの徴候の1つである対人的回避に関連するものであり、シャイネスが高ければ、社会的場面に出ることに困難をきたすものと考えられる。因子2(感情的側面：緊張)についても、逆転項目が含まれる。シャイネスが高ければ、身体・生理的徴候がみられ、主観的に緊張しているだろう。因子3(感情的側面：過敏さ)についていえば、神経過敏であることは、過度のメタ認知を引きおこしやすく、それがまたシャイネスを引きおこす

Table 5-1 調査 I における最終的な因子分析結果

質問項目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5	共通性
因子 1 行動<消極性> $\alpha=.85$						
*私は人と広くつきあう方だ。	.80	.12	.04	.13	-.08	.69
*自分から進んで友達をつくることが多い。	.79	.00	-.03	.16	-.01	.66
*知らない人と知り合いになるチャンスを生かすようにしている。	.68	.10	.08	.10	.04	.49
*私は異性とよく話す。	.65	.13	.16	.12	-.05	.48
*初めての場面でもすぐうちとけられる。	.61	.29	.10	.21	.01	.52
因子 2 感情<緊張> $\alpha=.81$						
*人前に出ても冷静でいられる。	.24	.69	.20	.18	.05	.61
*対人的な場面で赤面するようなことはほとんどない。	.11	.63	.06	.13	.00	.43
*評価されるような場面で手や足がふるえることはほとんどない。	.06	.61	.28	.09	.05	.46
対人的な場面で緊張し、心臓がドキドキすることが多い。	.04	.60	.34	.20	-.03	.51
*私は社会的な場面でもいつも落ち着いていてくつろいでいられる。	.32	.53	.12	.22	.10	.45
因子 3 感情<過敏さ> $\alpha=.79$						
人と会話をしていて神経過敏になることがよくある。	.14	.25	.66	.23	.24	.63
気楽な集まりでも異性があると神経過敏になったり、緊張したりすることがよくある。	.23	.20	.59	.07	.20	.48
人と話をしていて気が散って考えがまとまらないことが多い。	-.01	.18	.52	.29	.13	.40
個人的な質問をされるとうまく答えられず、声をつまらせてしまうことがある。	.08	.21	.49	.28	.20	.42
対人的な場面で自分自身のことに過度に注意が向くことが多い。	.04	.20	.49	.05	.28	.36
因子 4 認知<自信のなさ> $\alpha=.78$						
私には人に好かれるような魅力がほとんどない。	.23	.14	.15	.75	.04	.66
他の人は私と一緒にいては不愉快にちがいない。	.17	.18	.14	.62	.13	.49
他の人は私を無能な人間だと思うにちがいない。	.17	.23	.11	.58	.06	.43
会話などで話題がとぎれてしまうのは、いつも自分の方に責任がある。	.18	.11	.34	.49	.20	.44
私が内気なのは持って生まれた性格だから変えられない。	.34	.15	.19	.34	.07	.29
因子 5 認知<不合理な信念> $\alpha=.66$						
私は会う人すべてから好かれ、受け入れられなければならない。	-.06	-.11	.12	-.03	.63	.43
私は他の人と同じようにたくさん話すことができなくてはならない。	-.09	.10	.20	.02	.59	.41
デートの申し込みのように人に何かをたのんだ時、断られるのはみっともないことである。	.08	.08	.25	.13	.51	.35
人に自分の欠点を見つけれられるのは、恐ろしいことだ。	.14	-.03	.24	.15	.45	.30
初対面の人とうまく会話できなくても問題ではない。	-.03	.05	-.01	.07	.35	.13
因子負荷量 2 乗和	3.16	2.46	2.40	2.26	1.90	
寄与率 (%)	12.33	9.57	8.84	8.86	6.61	
累積寄与率 (%)	12.33	21.90	30.74	39.60	45.97	

*印は逆転項目。逆転項目の素点は反転させたうえで因子分析を行った。

ことも考えられる。因子4（認知的側面：自信のなさ）については、自尊感情（self-esteem）の低さとシャイネスが高い相関関係にあることが多く報告されていることも、これに関係しているだろう。因子5（認知的側面：不合理な信念）についていえば、シャイな人とそうでない人の特徴的なちがいとして認知をあげている研究者もおり、両者は、密接な関係にあると考えられる。

3. 性差の検討

Table 5-2は、調査Iの最終的な因子分析の結果、抽出された各因子の得点と全因子の合計得点を男女別に示したものである。

これらの得点の性差を検討するために、それぞれの得点について、*t*検定を用いて男女間に差があるかどうか調べた。その結果、因子1の得点については男性は、女性よりも有意に高かったが、その他の因子の得点及び合計得点については、男女間でいずれも有意な差はみられなかった。こうした因子論的妥当性を有する25項目を用いて、調査IIで実施する質問紙を構成した。この質問紙の因子1の得点に関してだけは、男女差がみられたが、男女の平均点の差は1点未満とわずかであり、差が有意になったのは、調査対象者が1,000名以上と多数であったためと考えられる。また、合計得点に男女差がみられなかったことは、たとえば相川（1991）の結果とも符合する。このこのようなことから、総じて、ここで構成された尺度で測定されるシャイネスの性差は特に問題にしないでよいと考えられる。

調査II

目的

調査IIの目的は、調査Iで作成された特性シャイネス尺度（Waseda Shyness Scale; 以下WSSと略す）の信頼性及び併存的妥当性と臨床的妥当性の検討を行うことである。

方法

(1) 平行検査の実施

WSSの併存的妥当性を検討するために、以下の通り実施した。

Table 5 - 2 調査 I の最終的な因子分析で抽出された各因子の得点
と合計得点の男女別平均値及び SD

	男性	女性	t 値
因子 1	14.58 (4.52)	13.60 (3.91)	3.81**
因子 2	15.21 (3.84)	13.54 (3.68)	1.49
因子 3	13.31 (3.76)	13.25 (3.21)	0.29
因子 4	12.41 (3.68)	12.47 (2.97)	0.33
因子 5	13.65 (3.69)	11.00 (3.32)	1.78
合計得点	69.15 (13.70)	68.18 (11.79)	1.24

* $p < .05$ ** $p < .01$ ()内は SD

調査対象者：

関東圏の10大学10学部，3短期大学，2専門学校に通う学生。調査対象校の選定の際には，可能なかぎり多様な学校・学部で調査を行うようにし，男女の比率や理系・文系の分類において著しく偏ることのないよう留意した。

併存的妥当性の検討のために，WSSと平行検査を実施した。記入もれや記入ミスがあったものを除いた有効回答者合計1,079名（男性451名，平均年齢19.71歳，SD 1.43；女性628名，平均年齢19.43歳，SD 1.24）のデータを分析対象とした。

調査時期：

1994年10月上旬から12月中旬にかけて行った。

平行検査：

以下の検査をWSSと一緒に綴じ，実施した。順序の効果を相殺するために各々ランダムに綴じた。日本語版SADS（石川ら，1992），特性不安尺度（以下STAI-T；岸本・寺崎，1986），self-esteem尺度（遠藤・安藤・冷川・井上，1974）。¹⁾

手続き：

WSS及び平行検査を実施した。実施の方法は，調査Iの予備調査と基本的には同じであるが，1大学については授業の実施上の都合で，授業内において質問紙の1項目ずつを調査者が読み上げ，そのペースにあわせて回答させるという形をとった。また，別の1クラスについては，その担当教員に質問紙を託し，自宅で回答させるようにしてもらい，という形をとった。その後，全ての回答をまとめ，結果の項で述べる分析を行った。

(2) 再検査の実施

WSSの信頼性を検討するために，以下の通り実施した。

調査対象者：

平行検査の調査対象者で，再検査にも回答した者。記入もれや記入ミスのあったものを除き，有効回答者合計302名（男性153名，平均年齢19.84歳，SD 1.00；女性149名，平均年齢19.94歳，SD 1.23）のデータを分析対象とした。

1) このself-esteem尺度は，Janis & Field (1959) によって作成されたものを遠藤らが日本語訳したものである。しかし，遠藤らはこの日本語版の標準化に完全に成功したわけではなく，一部の項目については，G-P分析による項目分析の結果，得点の上位者と下位者を有意に区別できていないものがあった。本研究では，こうした項目を除外し，本来23項目であったものを18項目にして実施した。この方法は，相川(1991)による特性シャイネス尺度の作成の際にも用いられており，シャイネスと高い相関を得ている。

調査時期：

1994年10月上旬から11月下旬にかけて行った。

手続き：

信頼性検討のために、平行検査の対象者の一部に、1ヵ月の期間をおいてWSSを再び実施した。

(3) 臨床的妥当性の検討

WSSの臨床的妥当性を検討するために、以下の通り行った。

調査対象者：

都内の2つの心理相談所に来談した、社会恐怖を訴えるクライアントの群42名（男性33名、平均年齢32.09歳、 SD 9.45；女性9名、平均年齢30.44歳、 SD 10.97）を臨床群とした。これと同数の者を平行検査の対象者の中からランダムに選び、健常群とした。

調査時期：

1994年10月下旬から12月中旬にかけて行った。

手続き：

WSSを臨床群にも実施した。実施の方法は、質問紙を各カウンセラーに託し、カウンセリングのセッションのはじめの段階でクライアントに回答させる、というものであった。その後、全ての回答をまとめ、分析を行い、健常群と比較した。

結果と考察

(1) 信頼性の検討

再検査法による信頼性の検討：

WSSの各因子の得点及び合計得点について、検査-再検査間の得点の信頼性係数を示したのがTable 5-3である。この表から明らかなように、2回の検査間の相関は非常に高いものであった。この結果から、本研究におけるシャイネス尺度の信頼性は高いものであることが認められた。

内部一貫性による信頼性の検討：

調査Iの本調査における有効回答者のデータを対象としてCronbachの α 係数を求めたところ、 $\alpha = .85$ という値が得られた。各因子については、 $\alpha = .66$ から $\alpha = .85$ の間であった(Table 5-1)。この結果から、WSSが許容できる内部一貫性を有しているこ

Table 5 - 3 WSS の各因子及び合計得点の信頼性係数

	信頼性係数
因子 1	0.86**
因子 2	0.66**
因子 3	0.68**
因子 4	0.75**
因子 5	0.78**
合計得点	0.82**

* $p < .05$ ** $p < .01$

とが示された。

(2) 妥当性の検討

併存的妥当性の検討：

WSSの各因子及び合計得点と、平行して実施されたSADS, STAI-T, Selfesteem尺度との相関係数は、Table 5-4に示すように、それぞれ.77, .66, .69であった。これらの値は、併存的妥当性を検討した結果として適度なものであり、WSSの妥当性が裏づけられたといえる。

臨床的妥当性の検討：

健常群と臨床群のWSSの各因子の得点と合計得点及びSDは、Table 5-5に示す通りである。両群の平均得点を比較したところ、因子4以外は、いずれも臨床群の得点が健常群より有意に高いかその傾向があることが示された。また、合計点では、臨床群は、健常群より有意に高い得点を示した。このことから、WSSは、社会恐怖のクライアントを弁別できる可能性が高いといえよう。

総合的考察

調査I, IIの目的は、認知・感情・行動の3側面から特性シャイネスを測定する尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することであった。

尺度の因子構造を検討した結果、行動的側面では対人的消極性、感情的側面では緊張及び過敏さ、認知的側面では自信のなさ及び不合理な思考の因子が抽出され、それらが因子論的妥当性を有していることが示された。したがって、本研究で認知・感情・行動の3つの側面についての特性シャイネス尺度を作成するという試みは、一応成功したといえる。

因子1は、行動的側面に関するものであった。これについては、項目作成の段階で行動的側面の項目にノンバーバル行動や社会的スキルを問うものも入れたにもかかわらず、最終的な項目は、全て対人関係において「消極的」であるかどうかを問うものとなった。これらの項目は、Cheek & Buss (1981)のシャイネスと社交性は区別すべきだ、という指摘を受けて、対人関係に回避的であるかについて問うことをねらいとしていたものである。このように「回避」が大きな負荷量をもって残ったということは、これまである研究結

Table 5 - 4 WSS の各因子及び合計得点と平行テストの
相関係数

	SADS	STAI-T	Self-esteem
因子 1	0.30**	0.33**	0.24**
因子 2	0.24**	0.49**	0.57**
因子 3	0.24**	0.59**	0.63**
因子 4	0.19**	0.50**	0.49**
因子 5	0.12**	0.40**	0.50**
合計得点	0.77**	0.66**	0.69**

* $p < .05$ ** $p < .01$

Table 5 - 5 健常群と臨床群における WSS の各因子の得点と
合計得点及び SD

	健常群 (N=42)	臨床群 (N=42)	t 値
因子 1	14.12 (4.52)	16.81 (3.91)	2.94**
因子 2	14.98 (3.84)	16.33 (3.20)	1.76 †
因子 3	13.74 (3.47)	15.98 (4.19)	2.68**
因子 4	12.67 (3.60)	13.33 (3.17)	0.90
因子 5	12.86 (3.80)	14.33 (3.38)	1.89 †
合計得点	68.37 (15.47)	76.80 (13.77)	2.65**

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ ()内は SD

果のいくつかと矛盾する。たとえば、Harris (1984) は、シャイネスの定義に回避行動を含めることに批判的である。また、Cheek & Watson (1989) によるシャイな女性に自由記述をしてもらった研究においても、回避行動について記述した者は6%だけであった。しかしながら、多くのシャイネス尺度 (e.g., 相川, 1991) に回避行動の項目が含まれていることやシャイネスの徴候や定義の中に回避行動を入れる研究者も多いことから、やはりシャイネスにとって回避行動は重要な要素であるとも考えられる。

感情的側面に関しては2つの因子が抽出されたが、この2つは微妙に異なるものを表しているように思われる。

因子2の「緊張」には、「赤面」「手足のふるえ」「緊張して心臓がドキドキする」など直接的具体的な身体的反応を問う項目と「冷静かどうか」「落ち着いてくつろいでいられる」など全体的な身体的緊張または情動を問う項目が含まれているといえる。

因子3の「過敏さ」に含まれる項目は、「会話で神経過敏になる」「異性がいると神経過敏になる」「人と話していると気が散って考えがまとまらない」など、人といることに神経質であることを表現しているようである。また、この因子3に含まれる「個人的な質問をされるとうまく答えられず、声をつまらせてしまうことがある」「個人的な質問をされる」という要素のゆえに、ある意味でこの項目が認知的側面に関する項目であるとしたほうがよいという見方もあるかもしれない。また「自分自身に過度に注意が向く」という項目は、メタ認知を問う項目である。しかし、この2項目についても、先の「人といることに神経質である」ということを考えると、やはり感情的側面に含めて考えてよいのではないだろうか。

因子4と因子5は、共に認知的側面を問う項目だが、これらも微妙に異なる側面を表しているものと思われる。

因子4には、たとえば「私には、好かれるような魅力がない」「私と一緒にいては不快にちがいない」「会話などで話題がとぎれるのは、いつも自分の方に責任がある」といった項目がある。これらの項目に共通するのは、自己に関する概して抽象的な、あまり根拠のない自信のなさを表している、ということではないだろうか。

それに対して、因子5には、「私は会う人全てから好かれ、受け入れられられなければならない」「私は、他の人と同じようにたくさん話すことができなくてはならない」などのように「すべし」「ねばならない」という表現をとるものがあり、いずれも不合理な考え方であるといえる。また、「デートの申しこみのように何かを頼んだ時、断られるのは

みっともないことだ」「自分の欠点を見つけられるのは恐ろしいことだ」といったものもある。これらも、自分自身をとりつくろうことに強迫的になっていることを表現をしているように思われる。そこで、「不合理な信念」と命名した。

なお、調査Ⅰで作成された特性シャイネス尺度、つまりWSSの因子1の得点にはわずかな男女差がみられたが、既に述べた論点より、WSSの得点の男女差は積極的にとりあげなくてもよい、と考えられる。

さて、調査Ⅱでの信頼性の検討においては、再検査法による信頼性係数及び α 係数が高い値を示し、WSSの信頼性は高いものであることが認められた。

妥当性の検討のうち、併存的妥当性の検討には、WSSと平行検査であるSADS、STAI-T、self-esteem尺度の因子毎の相関が求められた。その結果、いずれについても満足できる値が得られ、WSSは併存的妥当性を有することが明らかになった。

各々の検査についてしてみると、まず、WSSとSADSのとの相関は、「高い相関あり(.77)」を示す数値が得られた。しかし、因子毎の相関は高いとはいえなかった。このSADSの項目は、「回避」的行動に関するものと、「リラックス」「過敏」「緊張」を問うものが大半を占めている。これらは、「行動的側面」及び「感情的側面」に関するものだが、WSSとの相関が非常に高いとはいえない。それは、SADSがそもそも1つの社会不安の尺度から認知的側面を分離して作成されたものであり、包括的な尺度でないことと関連があるかもしれない。このことからWSSの認知的側面とSADSの相関が低かったことも説明できるだろう。WSSに特徴的な認知的側面の重要性が示唆される結果といえるかもしれない。

次にWSSとSTAI-Tについては、「中等度の相関あり(.66)」という値が得られている。各因子毎に検討しても.33～.59とほぼ相関があると考えられた。そもそもシャイネスが社会不安の下位概念であり、社会不安は不安の下位概念であることから、これらの結果は妥当であるといえる。

そして、WSSとself-esteem尺度についても、「中等度の相関あり(.69)」という値が得られており(この尺度は得点が高いほどself-esteemが低いというタイプのものである)、包括的なself-esteemの尺度とシャイネスの尺度には、負の相関があるという従来の研究(相川1991; Cheek & Buss, 1981; Cheek, Carpentieri, Smith, Rierdan, & Koff, 1986; Hansson, 1986; Jones *et al.*, 1986a)と一致した結果が得られた。特に相川(1991)の特性シャイネス尺度の作成の際も、このself-esteemと同一の尺度を用いてお

り、シャイネス尺度との相関が認められている ($r = .45$)。各因子毎に検討すると、因子1の行動的側面との相関は低いですが、それはself-esteem尺度は認知面を測定しているからであると考えられる。self-esteemの低さは、シャイネスに非常に影響している可能性が示唆され、シャイネスに対する臨床的介入の際の手がかりとなるだろう。また、self-esteemとは、「自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚である (Blascovich & Tomaka, 1991)」ことから、認知的側面（このうちでも特にメタ認知）と密接につながっており、このようにself-esteemとWSSの相関が高いのは、本尺度で認知面の項目を取り入れたためである、という可能性もある。

上述したように、相川 (1991) は、特性シャイネス尺度の作成の際に本研究と同一のself-esteemに関する尺度を用いて妥当性の検討をしているが、その際の特性シャイネス尺度とself-esteem尺度の相関は.45であり、本研究の相関の値.69に比べて低い。このことは、相川の特性シャイネス尺度が行動面、感情面、self-labelingだけを測定するものであるのに対して、本研究では、認知の歪みやメタ認知の項目を含めたためかもしれない。

WSSが社会恐怖のクライアントという臨床群と、一般の学生の健常群とを有意に弁別したことから、臨床的妥当性も有していることが認められた。しかしながら、臨床群の年齢は健常群より10歳以上高い。こうした要因が、因子4で有意差が得られなかった、という結果に影響していることも考えられる。なぜならば、この度の健常群は青年期にあたり、一般的に青年期は成人期よりもシャイであると思われるからである。このことを踏まえると、臨床群のサンプルも青年期にしほれば、因子4の有意差も得られる可能性があり、この因子の臨床的意義もみいだせるかもしれない。今後もクライアントのデータをなるべく多く収集し続けることによって、臨床群を健常群の構成に近づけたうえで再検討することが課題であろう。

以上のように、本研究では若干の課題が残った。しかし、本研究によって、特性シャイネスを認知・感情・行動の側面から総合的に測定することができる新しい特性シャイネス尺度 (Waseda Shyness Scale: WSS) が開発された。したがって、この尺度を利用することによって、認知的側面を含めてシャイネスの高い者をスクリーニングしたり、SITはもとよりCBT一般の効果を測定することが可能になった。それゆえに、この尺度を本論文の他の研究で活用した。

第3節 本章のまとめ

シャイネスについては認知・感情・行動の3側面があることが有力な見解となりつつあるにもかかわらず、認知的側面を含めてその全ての側面を測定できる尺度は存在しない。人間の認知・感情・行動の側面を総合的に理解し、アプローチするCBTの観点からは、特性シャイネスを認知・感情・行動の3側面から測定できる尺度が是非必要である。そこで、研究1ではそのような尺度の開発をめざした。

結果として、「行動：消極性」「感情：緊張」「感情：過敏さ」「認知：自信のなさ」「認知：不合理な信念」の5因子合計25項目からなる、特性シャイネス尺度が作成され、その信頼性・妥当性も十分なものであることが確認された。すなわち、認知的側面を含めて、認知・感情・行動の側面から総合的にシャイネスをとらえることができる新しい特性シャイネス尺度が完成した。このことによって、シャイネスの高い者を認知的側面も含めてスクリーニングしたり、SITを含めたCBTの効果を明確に評定することができるようになった。そして、この尺度は、本論文中の他の研究において生かされた。